

令和 5 年度第 5 回茅ヶ崎市住まいづくり推進委員会議事録における主な意見

○事務局

本日は、特に施策 1 2 を含む「取組 5 「茅ヶ崎らしい」住まい・暮らし方の推進」について、来年度から進めるにあたり、進め方や留意すべき事項などについて、ご意見いただきたい。

事務局としては、施策 1 2 「若者や子育て世代が魅力を感じる住まいや住まい方の整備」に向けて、そのような世代を対象とした座談会を開催し、住まいとしての「茅ヶ崎らしさ」や、求められている「住まい」・「住まい方」についてご意見をいただき、そのご意見を集約しながら、施策 1 3 「茅ヶ崎らしい住まい・暮らし方の発信」として、市の他課と連携してあらゆる媒体を活用した発信や、表彰制度など茅ヶ崎に住むモチベーションにつながる施策について検討・実施していきたく考えている。

○事務局（高山主幹）

1 番最初は地域の困り事が様々あって、それぞれの地域に対応できる方々を、住まいにまつわりながら入っていきたい。

空き家の問題は市内全域から相談があるので、そういった問題を解決しながら、茅ヶ崎らしい家についても、こういうものは良いねと地域で話しながら、考えていきたい。

○松本委員長

「取組 5 茅ヶ崎らしい住まい・暮らし方の推進」については、既に地価が上がって、住みたいという方も増えている傾向にあるので、今はチャンスの時期かと思う。

空間やハードを良くすることで、暮らし方も良くなる。この住まいづくり推進委員会の範疇を住宅政策とすると、やはりハードの部分が根本にはあると思う。

取組 5 でやることは、まずは自分たちなりの茅ヶ崎らしい住まい・暮らし方を探してみる、あるいは新しく来た方と住み続けられている方双方を意識したうえで考えてみることと思う。

取組 6 の地域コミュニティの活性化も、まずは既存施策の中から、どこか地域で取り組んでみたいというところがあれば、応援しながら頑張らせて実施していく。他の地区もそういうことも大事ななと思っていただけるような、発信の仕方を考えるべきと思う。

○宇佐見委員

座談会のメンバーは、その後の施策を決めていくにあたって、大変重要になってくると思う。

オンラインの仕事ができる方を中心に茅ヶ崎に転居されている方が多い印象で、そういった方に対して、市の方から「こういう取組したいのですが、協力してくれませんか。とお声掛けをして集まっていただく。来るのを待っているのではなく、こちらからある程度目星をつけて協力をお願いすることは、これから必要かと思う。

○入原委員

有楽町に NPO 法人ふるさと回帰支援センターがやっている移住相談センターがあり、そういった機関も利用しながら、積極的に動画や移住経験者のインタビューを流すのも 1 つである。

地域コミュニティの創出を考えたときに、困ったときに頼れるところがあるとコミュニティができるのだと思う。委員皆さんが持っている情報を都市政策課が集約して地域に伝えるということで、地域コミュニティの創出はできてくると思う。

○鈴木委員

茅ヶ崎は都会的に大きいビルを建てることなどはしない方が、返って良いのではないかと感じている。海もあり、里山もあり、そういったことが茅ヶ崎の良さだと思う。

○野口委員

市に移住した方ばかりを対象とするのではなく、どこかは決めていないけど移住したいと感じている方をうまく把握して、Zoomを通じてそういった方のニーズを把握するのがよい。

また、転出してしまった方に、なぜ転出したのかななどをアンケートで聞いておくのもよい。

また、若い方が大学進学や就職を理由に出て行ってしまうので、出て行った後、どういうことがあったら戻ってきてくれるかということや大学生や高校生と懇談してみるのもよい。

二宮町は、行政でなく住民が動いて、東京都心などで二宮町に転居しませんかという発信を行っていて、それなりに効果が出ている。行政が動かず、住民が住民目線で茅ヶ崎の良さを発信すると効果的なのではないか。

新しい移住者のウェルカムパーティーを行う手も有効である。

行政から認められたコーディネーターが入ればなんとかなるということは絶対ないわけで、そういった自主的に頑張っているところをどうやって行政が後ろの方で温かく見守れるかを考えるべき。あまり行政が関わりすぎると、コミュニティはなくなってしまっているのでやめるべき。

必ずしもNPOだけでなく、NPO的な方とどうやって接点を作っていくのか、あるいは子育て世代のイベントに、後ろからどうやって応援してあげられるかということである。

このプランでいう地域コミュニティとは何なのかをはっきりさせた方がよい。

地域コミュニティとは何なのかをはっきりしておかないと、取組6の施策の展開が大変になって、住宅政策だけでなく、防災や福祉、コミュニティ作りまでやることになってしまう。

庭に花を植えて会話が生まれるまちにする、公園の中でカフェをやったりキッチンカーを連れてくる、高齢者のためにキッチンカーを定期的に来てもらう、空き地をみんなで使える場所にしてコミュニティ施設にするなど、まちの価値の底上げは住まいの政策としてやっていくことが領域なのではないかと思う。

これプラス住宅の質の話ということで、茅ヶ崎は風通しの良い家をもっと作ろうねという話をマンション業者や戸建て業者と議論することや、できればお勧めの住宅のプランを作ってみて、必ずその住宅にはサーフボードのラックが置いてあるなどのモデルも考えられると思う。

○加藤副委員長

様々な民間の活動団体、また、空き家を活用している団体などに集まっていただきヒアリングをするなど、民でやっていることを把握することが重要だと思う。

民の実態はどうなのかの把握に努めることで、様々な芽をつかむことができると思う。

まちちから協議会がやはり調査の基本ではあると思う。その中で、どんな課題があり、どんな支援をしているかという実態を掴んで、その後に福祉と居住の連携などの仕組みづくり、それから実際に地域コミュニティはどうなっているのかを捉えていくのかと思う。

○渡邊委員

子育て世代の同級生が昔、以前平塚に住んでいて、茅ヶ崎に戻ってきたら結構平塚の方が恵まれているのだよねと言っていた覚えがある。行政サービス面の底上げも必要だと思う。

茅ヶ崎はどうしてもイメージ先行だと思うので、SNSなどで発信することによって、茅ヶ崎ってこんなところなのだと思っていただく必要もあるし、来た方対象のウェルカムパーティーなどそういった方を歓迎するという雰囲気をつくることも大事だと思う。

「茅ヶ崎らしさ」とは、良い意味で悪い意味でも、人が近いところかなと私は思うので、そういう部分でうまく派生していければと思う。

○後藤委員

例えば子育て世代が行政から子育てのサークル情報や、ママのためのクッキングクラスがあるという情報をアピールして、子育て世代がもっと活用できると良いのかなと思う。

○朝倉委員

「茅ヶ崎らしさ」というものは、やはり田舎を大事にしようよ、そこを忘れちゃいけないのだろうと思う。素朴な生き方を忘れないで生活してくれる人が来てくれるといい。

○竹内委員

魅力発信のPR施策といえば、他の自治体でもいくつか事例がある「住宅の表彰制度」を、比較的わかりやすい取り組みとして茅ヶ崎市においても参考にすべきだろうと思う。

これからの人口減社会では、地域の魅力によって住宅が生き残れる時代へと変わってきている。つまり住宅の存続は地域力にそのウエイトがかかっている。

取組6の地域コミュニティへの期待は、それが住まいや暮らしづくりのいわば基盤にあたるものと理解すれば、事業やエリア等の対象、短期・中長期のコーディネーター派遣などモデル的な取り組みを含めしっかり議論する必要がある。

1つの住まいを作ることは近隣とのつながりにも関係するため、個々の住まいづくりや空き家の活用を含め具体的な事業を通して地域にアプローチすることが必要である。

一定の広さの地域問題を取り上げる場合は、それぞれの地域的なコミュニティのまとまりに沿いながら、例えば、単位自治会が中心となるところ、テーマによってはまちぢから協議会のまとまりがよいなど、必要に応じて巾を持たせ柔軟に対応していくことが必要である。

○青柳委員

茅ヶ崎では、障壁を取り除くための色んな仕組みや仕掛けを13地区に分かれて地域包括支援センターなどを中心に色んな施策をしていて、障壁が解決しやすい環境はできてきている。

そのような仕組みの中でも、住まいの問題が解決できるわけではなく、そういう諸課題を解決できるような機能を持った住宅が出来て合わさったときに、茅ヶ崎らしいものができてくるのではないかと思う。

茅ヶ崎をアピールしたいような市としての大きな施策が1本あって、そのうえで個々のところでは、住民自治を尊重しているという側面もあり、それらをうまく融合する必要がある。

13地区それぞれの課題なのか、全体の課題なのかを分けて考える話ではなくて、細かいところで考えて、かつそれを市全体の方針でも示していくかたちが必要だと思う。

こういうものが茅ヶ崎らしさだという地域の意見を行政としてしっかり集約して、茅ヶ崎という単位で、1本軸になるものを示していくことが、この委員会でやるべきことだと思う。

地域コミュニティの規模や13地区にこだわっていると逆に話が進めづらくなると思う。